

4 坂の集落の営みにみる歴史的風致

はじめに

三島市の地形は、市域東側の3分の2を箱根西麓が占める。この箱根西麓には、古代より標高846mの箱根峠を越えて東国へ向かう道が通っており、このうち、徳川幕府が江戸時代に整備した箱根旧街道（東海道のうち箱根峠越えの八里の山道）は、石敷きの道、いわゆる石畳の道としても著名である。さらに幕府は、箱根旧街道を往来する旅人に湯茶や休憩施設を提供させる場所として、三嶋大社から箱根峠までの箱根西坂に、塚原新田（つかはらしんでん）、市山新田（いちのやましんでん）、三ツ谷新田（みつやしんでん）、笹原新田（ささはらしんでん）、山中新田（やまなかしんでん）の五ヶ所の新集落からなる「坂の集落」をつくった。

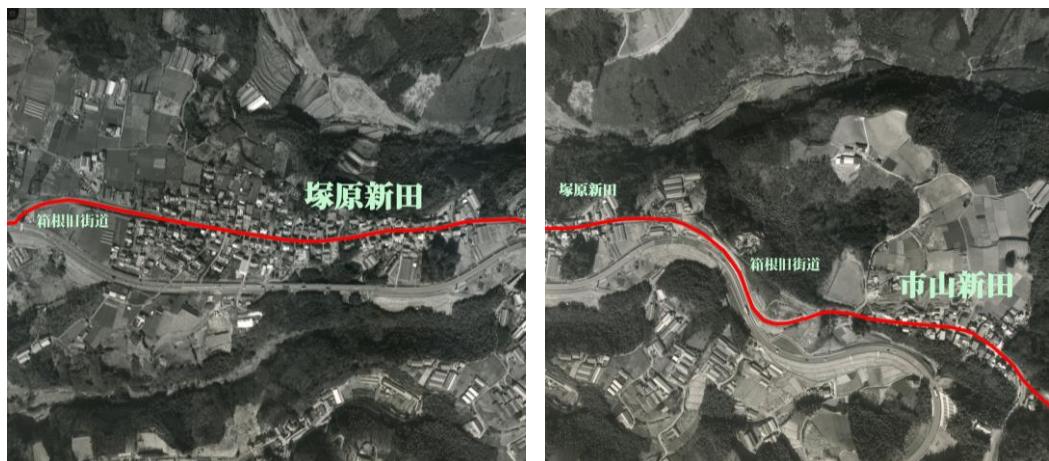


（1）坂の集落（塚原新田・市山新田・三ツ谷新田・笹原新田・山中新田の五ヶ新田）の 営みを構成する建造物と活動

慶長9年（1604）、江戸と京都を結ぶ街道の整備を開始した徳川幕府は、箱根峠を越える道として、現在箱根旧街道と呼称される山道の整備を行った。そして元和年間（1615～1624）、箱根旧街道のうち三島大社から箱根峠までの約12kmの箱根西坂に、往来する旅人に湯茶や休憩施設を提供させるため、五ヶ所の「坂の集落」をつくった。この新集落は、両側が深い谷となっている箱根旧街道の道筋に沿って細長に集落が形成され、下の写真のように箱根旧街道（赤線）に沿って細長に家並みが続くという特徴的な集落立地状況は、現在の坂の集落にも引き継がれている。

坂の集落（五ヶ新田）の航空写真（昭和58年（1983）撮影）と江戸時代（文化3年（1806））の東海道沿線絵図
集落両側は深い谷部で、尾根鞍部を通る箱根旧街道に沿って細長に集落が掲載されていることが写真や絵図から分かる。

写真



箱根旧街道（赤線）と塚原新田（中央）

塚原新田（左）市山新田（右）

絵図



塚原新田

市山新田

写真



三ツ谷新田（左）と 笹原新田（右）



史跡山中城跡（左）と山中新田（右）

絵図



三ツ谷新田



笹原新田

山中新田

① 水神講

坂の集落は尾根筋に集落があり、江戸時代の元和年間（1615～1624）に集落が開かれて以降、生活用水の確保が大変であったことから、各集落ともより高位地域の谷部に水源地を求め、または井戸を掘削する必要があった。特に水源地では、そこから竹の樋で集落まで水を引いていたが、竹の樋は毎年補修をする必要があり、また大雨や台風の時には流されたり外れたりするため、年中見回りをしなければならなかつた。

今では坂の集落のいずれも水の確保で苦労することはないが、当時一番水に苦労をした市山・三ツ谷新田では、水の大切さ、有難さを忘れないために、集落を形成した江戸時代当初に設けた井戸・水源地を今日に至るまで大切に保全してきており、同じく集落形成当



写真 市山新田・三ツ谷新田の合同の水神講



写真 市山新田の下井戸とお供え

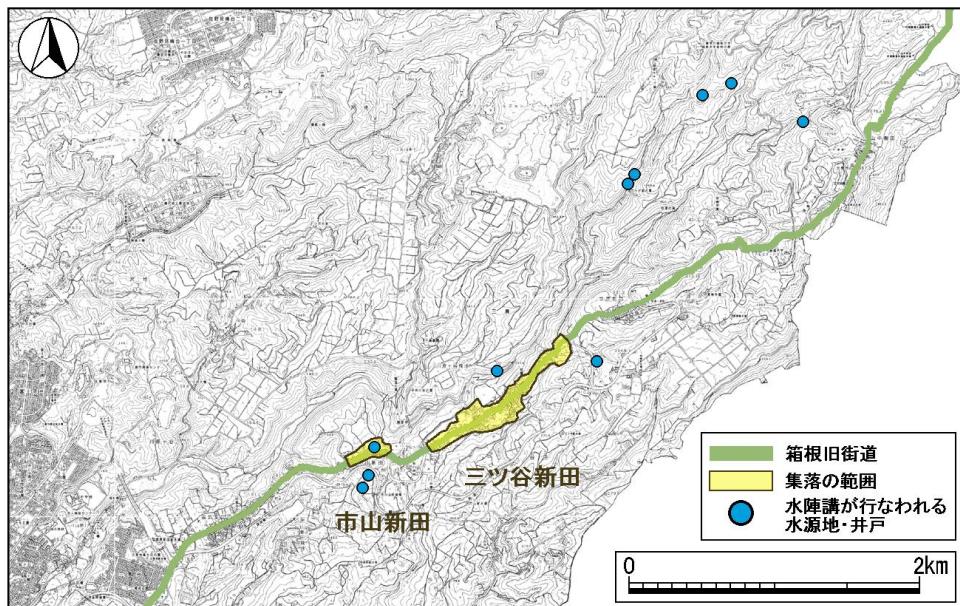


図 市山新田・三ツ谷新田で行われている水神講における水源地・井戸の位置

時から行っている祭礼の水神講を今でも続けている。毎年1月27日に16組に分けた2集落の組が輪番で10ヶ所の水源地・井戸を回り、竹に注連縄を張って、酒・米・塩を捧げ、井戸や水源地の湧水量を確認し、感謝の気持ちをもって供え物を捧げることで、先祖代々の水を求め続けた苦労を語り継いでいる。

② 氏神と祭礼

ア 氏神

塚原新田の氏神は、大山祇命を祭神とし山神社に鎮座している。社殿は、本殿流造、拝殿入母屋造妻入で、妻飾りに白い鷺が施されているのが特徴である。残されている棟札から延宝2年（1674）に再築されており、経年劣化による壁板の張り替え、屋根の葺き替えなどの修繕を繰り返しながら今日に至っている。明治4年（1871）、境内の大半を明治政府へ返納したが、その後返され、再び神社社有になった。

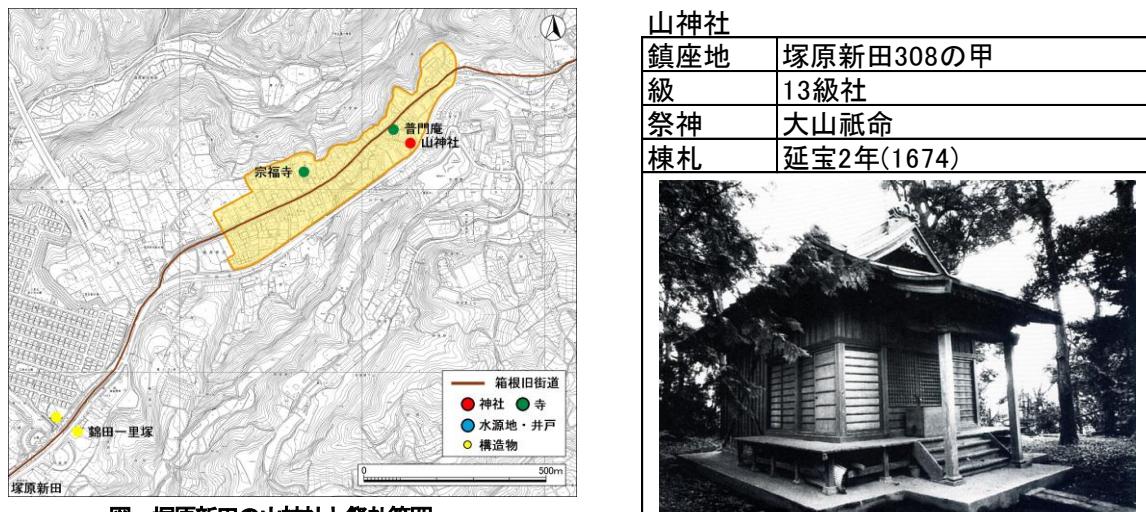


図 塚原新田の山神社と祭礼範囲

市山新田の氏神は、大山祇命を祭神とする山神社である。天正18年(1590)の豊臣秀吉の小田原攻め時、小田原北条氏の出城であった山中城攻めに伴ってこの地区は兵火に遭い、神社と共にそれまでの記録が焼失したと社伝に記されている。当社は、残されている棟札から享保14年(1729)9月に再建されており、経年劣化による壁板の張り替え、屋根の葺き替えなどの修繕を繰り返しながら今日に至っている。街道沿いの小高い丘に鎮座するこの神社は、市山の集落を一望するところにあり、集落の守り神として鎮座している。



図 市山新田の山神社と祭礼範囲

三ツ谷新田の氏神は高皇產靈神であり、天神社に鎮座し、さらに大山祇命を相殿する。社伝によると、明和3年(1766)正月の創立という。坂の集落(五ヶ新田)の中央に位置することや、その建立に際して隣村からも資金が贈られたこともあり、三ツ谷新田だけの氏神ではなく、この地方の総氏神の性格を持つ。

また、土砂崩れのため度々流されており「流の天神」とも言われている。昭和40年(1965)に現在地に移築された。



図 三ツ谷新田の天神社と祭礼範囲

笛原新田の氏神は、大山祇命を祭神とし、山神社に鎮座している。この山神社の最も古い棟札は、宝永2年（1705）のもので、天下泰平、国土豊饒と笛原村の安泰とを祈願し建立した旨の記載がある。ほか享保4年（1719）12月に同様の棟札と、宝暦2年（1752）6月、宝暦10年（1760）正月、明和5年（1768）2月、安永6年（1777）9月の棟札が残されており、社殿の老朽化に伴う外壁や向拝柱などの修繕を繰り返しながら現在に至っている。

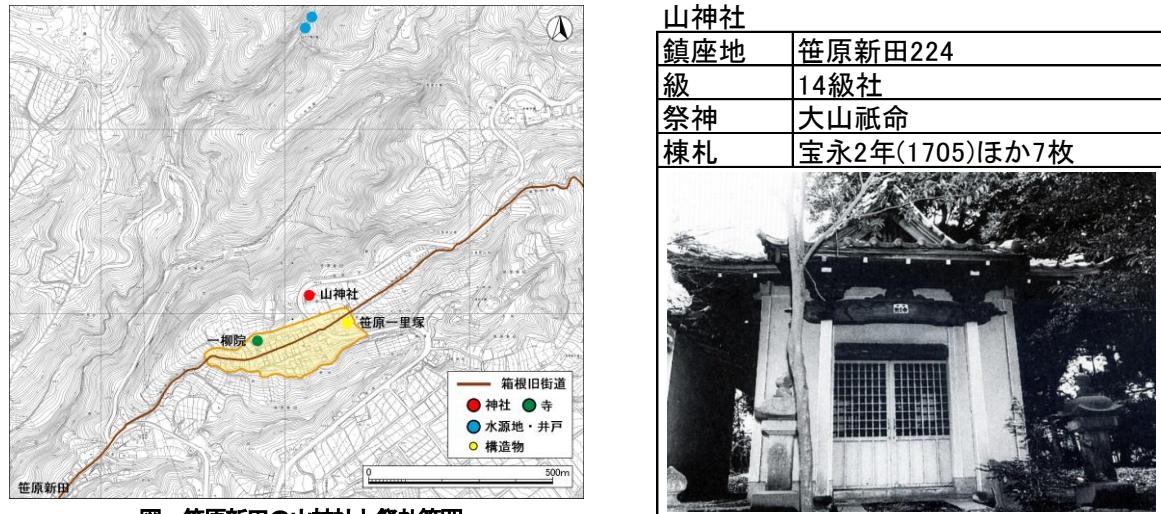


図 笛原新田の山神社と祭礼範囲

山中新田の氏神は、建御名方命、日本武命を祭神として諏訪・駒形神社に鎮座している。

この神社の創建は慶長6年（1601）の五街道の敷設とほぼ同時期で、山中新田に宿場に準ずる「間の宿」が成立した元和年間（1615～1623）のことと考えられている。

境内は史跡山中城の本丸にあたる。本社殿は、本殿流造、拝殿兼雨覆春日造の木造である。他地区と同様に経年劣化による壁板の張り替え、屋根の葺き替えなどの修繕を繰り返しながら今日に至っている。

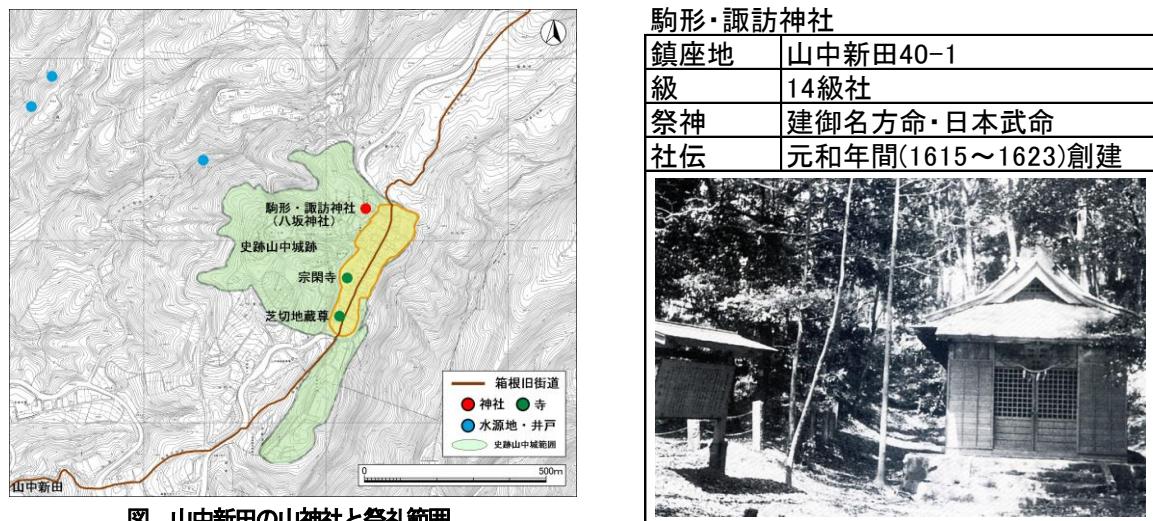


図 山中新田の山神社と祭礼範囲

イ 祭礼

坂の集落では、各集落の氏神である山神社などに三嶋大社から神主を迎えて、祭礼を行う。日照りや台風、土砂崩れなどの自然災害によって、生業である農業に被害を受け易い箱根西麓では、農作物の無事な育成は切実な願いであった。正月に五穀豊穣を祈願し、10月には秋の収穫の感謝を表す。祭礼当日は、各神社に幟を立て、神酒を酌みながら食事をする直会（なおりい）が催される。塙原新田では山神社、市山新田では山神社、三ツ谷新田では天神社、笹原新田では山神社、山中新田では駒形・諏訪神社が祭礼の舞台となる。

その他、各集落の秋祭りでは公民館で演芸会、神社境内では子ども相撲などが催され、笹原新田では子ども神輿、山中新田で行われる八坂神社のお天王さんでは大人達の神輿が集落内を練り歩く。これら坂の集落の祭りは、昭和2年（1927）田方郡錦田村（にしきだむら）自治会発行の『我等の郷土』にも記録が見られ、集落成立時から現在も続いている行事であり、集落内は皆顔見知りで、共同体としての住民間の結びつきを強くしている。



写真 塙原新田の山神社の祭礼に伴う直会



写真 市山新田の山神社の祭礼



写真 三ツ谷新田の天神社の祭礼



写真 笹原新田の秋の祭礼に伴う子ども神輿



写真 山中新田の駒形・諏訪神社での秋の神事

③ 山中城跡・宗閑寺と人々の営み

ア 山中城跡

国指定史跡である山中城跡は、坂の集落のうち一番上に位置する山中新田にある。この山中城は永禄年間（1560年代）、相模国の大田原に本拠を置く北条氏康により西方防衛の要として標高580mの箱根西麓に築城された。城内に街道（赤色：後の箱根旧街道）を通すことで、警察的機能を兼ねた関所として人々や物資の出入りを管理していた。

天正18年（1590）、天下統一を目指す豊臣秀吉に攻め落とされ、以後廃城となる。城内を通りていた街道は、江戸時代になると箱根旧街道として整備され、街道沿いにつくられた山中新田集落は大いに賑わい、その様子は享和2年（1802）に刊行された十返舎一九の『東海道中膝栗毛』にも描かれている。しかし、集落の背後にある廃城後の山中城跡は荒れるに任せて笹竹に覆われる荒蕪地となり、城の縄張りを研究する軍学者以外訪れる人はなかった。

明治・大正と時は過ぎ、昭和5年（1930）に転機が訪れる。地元山中新田に住む市川近太郎氏により、平板測量による実測図が作成されたのである。氏の覚書によれば、「去る昭和5年3月、（山中城の合戦で討ち死にした豊臣方武将）一柳直末の子孫である一柳貞吉氏の芳志によって宗閑寺門前に記念碑が建てられた。以来、学校や軍部の見学者が増えた。これを機に一柳氏は山中城を史跡に指定し、長く保存する必要を説き、まず山中城の実地調査、測量を市川に依頼してきた。そこで、市川は現地に入り、繁茂した草や竹を倒しながら數十日間、測量にあたり実測図を完成、この図を史跡指定申請書に添えて文部省に提出したところ、昭和9年（1934）1月、国の史跡として文部大臣から指定された。」とのことである。地元の市川氏が作成した実地調査図と山中城の戦いで討ち死にした豊臣方武将、一柳直末の子孫である一柳貞吉氏の尽力が山中城を史跡指定に導いた。そして、史跡指定されていたことが、約40年後の山中城跡の整備実施に繋がっていく。

昭和45年（1970）、当時の建設省による国道1号山中バイパス建設設計画案の提示を契機として、三島市は昭和47年（1972）から山中城跡の整備事業を開始、平成5年（1993）



図 城内を通る街道（赤色）と山中城

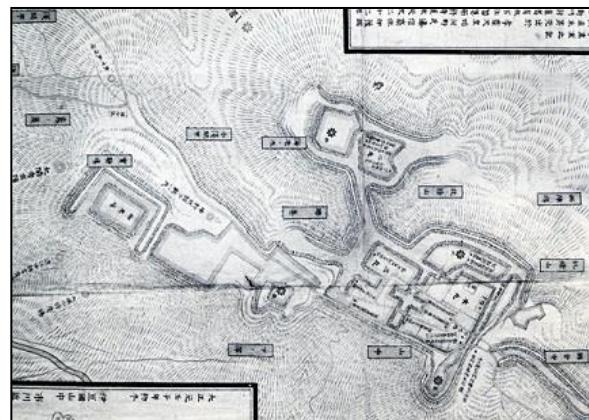


図 昭和5年（1930）市川近太郎氏作成の「山中城址之図」

までの21年間に亘って史跡指定地の公有化、発掘調査と環境整備を継続的に実施する。

昭和56年（1981）、三島市制40周年を記念して史跡公園として山中城跡を無料開放、以来、三島市民に広く親しまれている。また、整備された城内は北条氏の築城術の特徴である障子堀や畝堀、角馬出し曲輪（くるわ）の様子を間近に見学でき、平成18年（2006）には日本百名城に認定された。



写真 整備された山中城跡岱崎
出丸（手前：国道1号）

イ 宗閑寺

山中城跡内の箱根旧街道脇、山中新田の中央には、宗閑寺という浄土宗の寺がある。創建は元和年間（1615～1623）で、天正18年（1590）の山中城の戦で敗れた守備側北条方の副将、間宮康俊の娘お久が徳川家康に頼んでこの場所に建立した。

お久は、山中城の戦いで討ち死にした間宮一族の靈を弔うとともに、敵味方区別することなく、この戦いで亡くなった多くの人々を供養するために、宗閑寺を建立したのである。この精神は、お久の死後も山中新田の人々に引き継がれた。江戸時代には宗閑寺裏が集落の墓地となつたこともあり、境内にある討ち死にした武将の墓とともに、集落民により供養されてきた。



写真 山中城跡内にある宗閑寺

ウ 人々の誇りと営み

大正2年（1913）に、下集落の三ツ谷新田にある坂小学校の分校が宗閑寺脇につくられた。この分校は、昭和42年（1967）に廃校となるが、分校があった時から児童の父母が、分校や宗閑寺周辺の清掃・花の手入れを行っていた。廃校後の分校は、地区の公民館となり、また、祭礼の会場としても利用されて現在に至るが、分校当時から行われてきたこの清掃活動は、卒業生を多く含む地元老人会に引き継がれている。

その活動の背景には、集落成立時の江戸時代初期より続いており、地区の氏神である駒形・諏訪神社の境内社である八坂神社の祭礼である「お天王さん」をはじめ数々の地元の祭りがあり、共同体としての結びつきが強く、生まれ育った土地にある山中城跡に対する誇りを持っている集落の人々の思いがある。



写真 山中新田地区の神輿の準備

昭和47年（1972）の山中城跡整備開始、昭和56年（1981）の史跡公園としての公開開始、平成18年（2006）の日本百名城の認定という経過の中で、集落の誇りである山中城跡を大事にしたいという気持ちが、集落民の中でさらに高まった。市街地から離れた、交通の便の良くない箱根西麓山中に位置する山中城跡ではあるが、平成26年度（2014）には年間約25,000人の見学者が訪れている。

山中城跡自体を目当てに来る人、史跡内を箱根旧街道が通っていることから、自ら企画し、または旅行会社のツアーに参加してこの街道のウォーキングを楽しみながら沿線を散策する人、山中城跡には様々な人が訪れるが、その主目的はいずれも観光である。それゆえ地元山中新田の集落の人々は、自分の家の玄関先をきれいにすることと同じ思いで、自分たちの集落の誇りである山中城跡を清掃し、道路沿いに季節の草花を植え、手入れを行っている。これは、わざわざ山中城跡を訪れてくれた見学者を、少しでもおもてなしの気持ちで迎えたい、「山中城跡の整備された障子堀などの遺構も見事だけれど、集落内の道路や花もきれいだった」という印象をもって帰ってもらいたいという気持ちの表れであり、これは山中新田の集落の人々が先人から引き継ぎ、そして後世に繋げていきたい活動である。



写真 山中城跡 西ノ丸西側の障子堀とツツジ



写真 大正2年(1913)の分校設置時から続く
地元の人々の清掃活動

おわりに

江戸時代初期につくられた塙原新田、市山新田、三ツ谷新田、笹原新田そして山中新田の五つの「坂の集落」には、集落成立当時から続いてきた家並み、水神講、正月や10月に行われる集落の氏神への祭礼などの民俗習慣が、現在も残っている。

また、坂の集落を結ぶ箱根旧街道沿いには史跡山中城跡が残っており、地元山中新田にとって地域の誇りである。

その誇りの表れとして、長年に亘り集落の人々は城跡の玄関にあたる駐車場や国道沿線で清掃を行い、季節の草花を植え、手入れをしている。このような地域の人々の活動と一緒に、山中城跡は現在に良好な形で残されているといえる。

箱根西麓にある五つの坂の集落、それらを結ぶ箱根旧街道沿いにある山中城跡をはじめとする建造物・工作物は、地域固有の歴史的・文化的価値をもつ景観である。それらと、沿道に住む人々の営みやそれを後世に残したいという気持ちとが一体となって、三島市固有の良好な歴史的風致を形成している。

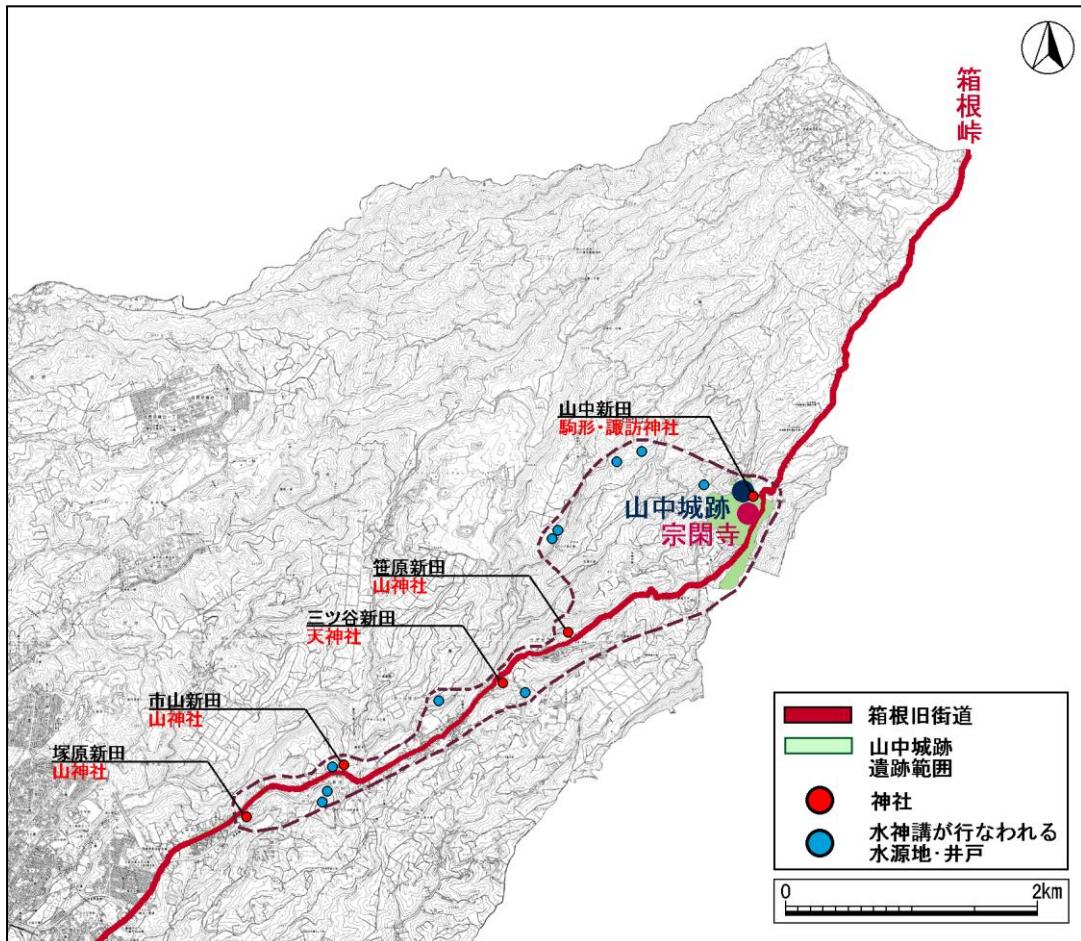


図 坂の集落の営みにみる歴史的風致の範囲

《コラム》箱根旧街道

箱根旧街道とは、江戸幕府により整備された東海道の一部で、三島宿から小田原宿までの通称「箱根八里」といわれる箱根峠越えの山道である。このうち三嶋大社から箱根峠までの約12kmの間を箱根西坂という。

幕府は慶長9年（1604）、東海道を整備し、街道沿いに松並木を植えるとともに、一里（約3.9km）ごとに一里塚を設置した。箱根西坂には江戸から25里目の山中一里塚、26里目の笛原一里塚、27里目（江戸約105km）の錦田一里塚（にしきだいちりづか）がつくられた。このうち道路両側に対になり現存している錦田一里塚は全国的にも貴重で保存状態も良いため、大正11年（1922）に国史跡に指定された。

箱根西坂は、延宝8年（1680）に箱根竹から石敷きの道に替える工事が行われた。この江戸時代の石畳が残る区間と、西坂上り口にあたる初音（はつね）の約1kmの松並木区間及び3ヶ所の一里塚、延べ5.05kmは、国史跡に指定されている。

かつて箱根旧街道は、街道を往来する多くの旅人に利用されていたが、明治22年（1889）に東海道線が開通すると利用者数が減っていき主要道ではなくなった。しかし、現在でも集落の発生当初から沿道に住む人々にとっては、畑へ向かう道、水源地や植林の手入れなどの山仕事へ行く生活道であり、道が荒廃しないように下草刈りを行い、街道環境の維持活動を行っている。

362本の松が並び立つ松並木区間では、昭和45年（1970）から、毎年立冬に害虫駆除のためコモ巻き作業が行われている。また、地元住民を中心に結成された「松並木と一里塚を守る会」と近隣中学校の生徒が隔月で清掃作業を実施している。



写真 国指定史跡 錦田一里塚と
榎（初音：下り車線）



写真 発掘された願合寺地区石畳



写真 現在も農家の人は石畳を
通り畑へ向かう（笛原新田）



写真 立冬に行われる松並木のコモ
巻き作業（初音）



写真 近隣中学校生徒による松並木
の清掃作業

《コラム》大根のすだれ干し

坂の集落は、箱根旧街道を往来する旅人相手の接客業を生業として繁栄したが、東海道線開通を境に旅人が激減し、接客業が立ち行かなくなってしまった。そのため、集落裏に広がる尾根斜面の耕作地を拡大して大根、長ニンジン、ジャガイモなどの根菜類の栽培を生業とする農業専門の集落へと変貌していった。坂の集落で育てられた野菜は美味しいと評判が高く、「坂もの」と呼ばれ、箱根や伊豆長岡の温泉旅館に高値で卸されることとなり、現在も旅館や飲食店と栽培契約をしている農家が多い。

また、坂の集落で育てられた大根は沢庵漬けにされることが多く、寒風が通る畑斜面を選んで丸太で簡易な足場を組んで干す「大根のすだれ干し」が行われる。富士山を背にした大根のすだれ干し風景は、明治から変わらぬ冬の風物詩である。

さらに、坂の集落の大根は、三島市内の臨済宗の修行道場である龍澤寺の雲水の托鉢とも深く関わっている。毎年12月9日、龍澤寺の雲水が箱根旧街道を上り、坂の集落に托鉢にやってくる。遠くから、雲水の「報恩（ほうおん）」と大きく野太い声が聞こえてくると、集落の人々は大根を自宅前の街道脇に用意し、雲水を迎える。坂の集落をまわると大根の数は200本以上となり、禅寺での貴重なおかずの一品となる。



写真 三ツ谷新田の大根すだれ干し



写真 市内を托鉢で巡る雲水

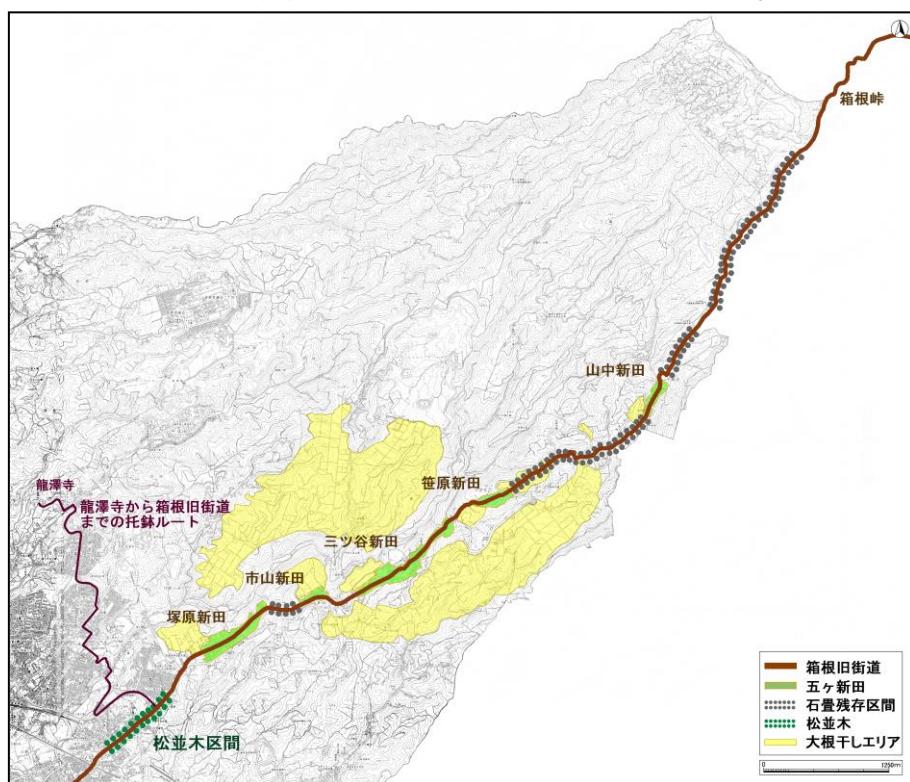


写真 箱根旧街道、石畠・松並木・大根干しエリア